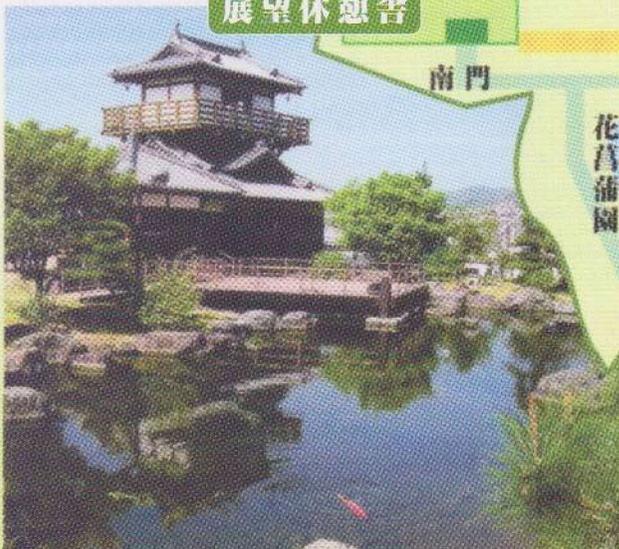


# 池田城跡公園

この公園は櫓風展望休憩舎を中心とした「市民の憩いの庭園」としてオープン。ここは、かつての城・池田城の栄枯盛衰を物語るドラマの舞台です。



CONTENTS	
★公園案内	
・施設概要	…5 ページ下段
・開園時間など	・池田駅発 ONE DAY ハイキング
・案内略図	…いずれも裏表紙
★「池田城」の興亡	…2~5 ページ

# 「池田城」の興亡

## 池田城はいつできたのか

### 池田城の名が登場する最古の史料

池田城はいつ築かれたのか、今のところ、これについて書かれた史料はありません。

『新修池田市史』第1巻で、池田城の名が登場する最古の史料として建武3年(1336)「平国茂軍忠状」を挙げています。この「軍忠状」には、後醍醐天皇の南朝方と足利尊氏の北朝方とが対立した南北朝の内乱の時、北朝方の芥河岡国茂の軍勢が、「池田城にて数日送」って夜詰めをしたという記述があります。この記述から、1300年代の前半、すなわち南北朝時代に池田城が存在していたのではないかと、いわれています。しかし、この時期に池田城の存在を認める場合、果たして、現在、城山町の台地上にある池田城跡を指しているのか、以下の点で疑問があります。

南北朝時代の内乱は北朝方対南朝方といった広域戦で、自分の領地を守るための戦い方ではない。したがって、城は千早赤阪城(千早赤阪村)のように山深い、しかも山頂や尾根づたいに築かれるものが多く、池田城のように街道や集落に接し、簡単にその存在が認識できる場所に築かれる例がほとんど見られないこと。

芥河岡氏の軍勢が夜詰めをしたというのであれば、ある程度の面積と防御機能(あるいは要害に富む)を有した城であると考えられるが、池田城の城域が拡大され、防御機能が高められるのは、発掘調査によれば1500年代になってからと推定されること。

こうした点から、建武3年の「軍忠状」に登場する池田城は、今私たちが認識している池田城跡ではなく、もしかしたら五月山山頂のどこかに城が築かれていたのかもしれない。前掲の『新修池田市史』でも場所について触れていないのはこのためと思われる。

### 現在の地に築城

池田氏は、勝尾寺(箕面市)蔵『勝尾寺文書』によれば、1200年代後半に現れ、しかもその本拠地が「鼻庭荘」であったと推定されています。当時は「藤原」の氏名を持っており、釈迦院(鉢塚2丁目)の宝篋印塔を建てた藤原景正も池田氏の一族と考えられています。この池田氏は南北朝時代のころから

力を付けはじめ、1300年代の半ばには勝尾寺の檀家になっていることが分かります。ただし、檀家衆の土豪30数人の中の一人として挙げられており、必ずしも抜きん出た存在ではなかったようです。また、摂津国守護赤松氏の家来になっていたことも分かっています。その後、どのような過程で成長を遂げたのか不明ですが、『勝尾寺文書』の永享8年(1436)「歳末巻数賦日記」(願主のために読誦した経文や度数を記して送った文書の控え)では、10人程度に固定化されており、80数年間で、土豪30数人から10人程度に淘汰され、池田氏はその中に残っていることが分かります。おそらく、このころには、支配領地が広がって国人(各地の、小規模な領地を支配した者)として成長し、支配の拠点として館を構えるまでになった、すなわち、1400年代の前半には、現在の池田城跡の場所に館を築いたのではないかと推定されます。永享8年以降、池田周辺の領地の侵略を企て始めていること、応仁元年(1467)に始まった応仁の乱の時、室町幕府の有力者で摂津守護細川氏の家来になっていること、文明元年(1469)の史料に池田城という名が登場していることなどがこの推定を補強するものと思われます。

## 池田城の構造と変遷

### 池田城が築かれた場所

戦国時代以前の城は、できるだけ崖、谷、川などといった自然の要害をうまく利用して築きます。池田城の場合も、城山町の台地と平野部との境にできた崖、杉ヶ谷川による谷を利用し、一部堀を掘って築いています。城の周りすべてを堀で囲むより少ない労力で済み、また、崖、谷を利用する方が、堀以上に防御の効果が期待できるのです。ただ、この



場所は重大な欠点があります。後方の五月山からは、城の中が丸見えになり、攻撃する側から見れば、池田城

の中の防御の様子が手に取るように分かります。事実、後述しますが、永禄11年(1568)織田信長が池田城を攻撃するとき、後方の山に陣を敷いたと『信長公記』に記しています。

## 最初に築かれた姿

現在の池田城跡の場所に築かれたのは1400年代の前半ごろと紹介しましたが、最初は、主郭部分（城の中心・本丸に相当する部分）と小さな曲輪（堀・土塁などで画された平坦部分）が取り付いただけの小規模なものでした。主郭の中には枯山水風の庭園（写真）が造られ、単に城に籠るだけのものではなく、生活の場所であったことを示しています。文明19年（1487）の『政覚大僧正記』によれば、政覚ら僧侶一行が有馬から帰る途中に池田城を訪れ、庭、倉を見て驚いたと記しています。



## 城の改修

この城の防御機能が発達し、また、城域が拡大するのは、文明元年（1469）以降、数々の攻撃、あるいは落城を経験していく過程でのことでした。池田城が最初に落城したのは、応仁の乱が起これ、池田氏が東軍の細川方の家来であったため、文明元年、西軍の山名方についた大内軍に攻められてのことでした。もっとも、この時はすぐに奪回し、城の被害はなかったようです。城が大きな被害を受けたのは永正5年（1508）、細川方が分裂して細川澄元と細川高国が争った時、池田氏が澄元についたため、細川高国の攻撃を受け落城した時です。発掘調査で、この落城による炭層・焼土が主郭に厚く堆積していることを確認しています。永正5年の落城後、城を復興する際、主郭の堀を広げるとともに、周りに土塁を設け、また、主郭のさらに外側にも堀を掘って防御機能をより高めています。永正5年の落城の後も、享禄4年（1531）の細川高国による再攻撃による落城などで改修の手が加えられたものと考えられますが、池田城がもっとも大きく変わったのは、永禄11年（1568）、織田信長の攻撃で落城した後のことでした。

## 池田城はなぜなくなったのか

### 荒木村重の台頭

荒木村重は丹波波多野一族の出身と言われ、父の高村とともに池田氏に仕えていました。永禄年間（1558～70）、城主池田勝正のころ、村重は力をつけ

## 街道を城内に取り込む

織田信長は永禄11年、足利義昭を擁して上洛、細川氏没落後、摂津に勢力を張っていた三好氏を討伐するため攻め入りました。摂津の国人たちは信長に寝返りましたが、池田氏は籠城して抵抗しました。しかし、町・城に火をかけられて降伏し、信長の家来になりました。

家来になり、城を改修する時、信長方の築城に用いられていた虎口（入り口）を採用しました。信長方の築城で用いられていた虎口は、城の中へ入る道を2度曲げるもので、それまでの池田城の虎口は1度だけ道を曲げるものでした。この時の改修で注目されるのは、城内に街道を取り込んでいることです。城の中に人が往来する街道が通っているという、少し変に思われるかもしれませんが、戦の時に街道を封鎖し、敵の往来を防ぐことが可能になります（この街道が城中に入る個所でも道を2度曲げている）。ただ、街道を取り込む時期は、池田氏の段階か、後に台頭する荒木村重の段階か、今のところ明らかではありません。

## 主郭の中の様子

永禄11年、落城後の主郭内部の改修の様子が、発掘調査で明らかになっています。

主郭中央には、平面が約10に四方の主殿を中心に、これより小さい建物や倉が取り付いています。建物の周囲には雨水を処理するための排水溝があり、暗渠で堀の中に流れるようにしています。主郭の北・東・南には土塁、西側には柵が設けられています。虎口は、それ以前は堀底から斜面を上がって内部に入る形態であったものから、南東隅を橋で渡る形態へと変えています。

城といえば、大阪城や姫路城のように石垣を持ち、天守閣や隅櫓といった建物をもつ近世城郭が想像されがちですが、池田城は近世城郭として発達する以前の、素堀や土塁に囲まれ内部に屋敷を持つ、戦国時代に一般的に見られる姿をしていました。

はじめ、やがて「池田二十一人衆」の一人にまでなりました。

元亀元年（1570）、池田氏が信長の家臣として各地を転戦させられていたころ、反信長派の「池田二十一人衆」が信長派「池田四人衆」のうち2人を殺害、勝正を追放するというクーデターを起こします。このクーデターで村重は池田を支配下にしてしまいました。

その後村重は、高槻の和田氏、茨木の茨木氏を滅ぼし、さらに信長に取り入って室町幕府滅亡に功を挙げて「摂津守」に任じられるまでになりました。そして、天正2年（1574）伊丹城を落とし、ここを有岡城と改めて居城にしたため、池田城は廃城になったといわれます。ちなみに、『中書家久公御上京日記』の天正3年4月に「(略)亦左方に池田といへる城有り。今はわりて捨てられ候」という記述があり、このころには池田城は廃城の状態になっていたことが分かります。

### なぜ池田城から伊丹城へ移ったのか

村重は伊丹へ移った後、城の改修とともに伊丹の町づくりを行います。それは城とともに町の周囲も堀・土塁で囲むといった「総構え」を行い、その中に町屋、武士居住区の区分を明確にした、近世城下町の初源的形態を有するものでした。村重の町づくりは、町への支配を貫徹させ、総構えによって防御をより頑丈なものにするためでした（後に信長が有岡城を落とすのに1年も要したのは、この総構えのためです）。

では、村重はなぜ池田でこうした町づくりを行わなかったのでしょうか。

『細川両家記』天文18年（1549）に

- 一、同正月廿四日宗三、多田衆引催候て池田、市庭放火するなり
- 一、同二月十二日に越水より伊丹へ取懸近郷放火させられけり

とあります。この記載から、池田には以前から「市庭」すなわち「市」が開かれる町屋があり、一方、伊丹には「市庭」の記載が見られないことから、町屋としての広がり小さかったと思われる。

市の開かれる場所は、だれの支配からも侵されない「公界」すなわち自由な場であり、本来、領主の支配権が及ばない場であったといわれています（小島道裕「戦国城下町の構造」『日本史研究』257号）。恐らく、既に町屋が広がっていた池田に比べ、町屋が比較的小さく、集落が散在していた伊丹で町づくりを展開する方が、村重にとってやりやすかったのではないかと想像されます。

もう一つの理由は、池田の地理的な要因があるのではないかと思います。伊丹は西摂平野の中心に位置し、当時の幹線道である西国街道にも接し、大阪湾も比較的近くにあります。しかし、池田は西国街道から離れ、西摂平野の中では大阪湾から最も奥まった位置にあります。一方、村重配下の摂津国の武将について見ると、摂津国の東端に位置する高槻城に高山右近、茨木城に中川清秀、南の尼崎城には村

重の嫡子村次、西端の花隈城（神戸市）に荒木村正を配置しています。

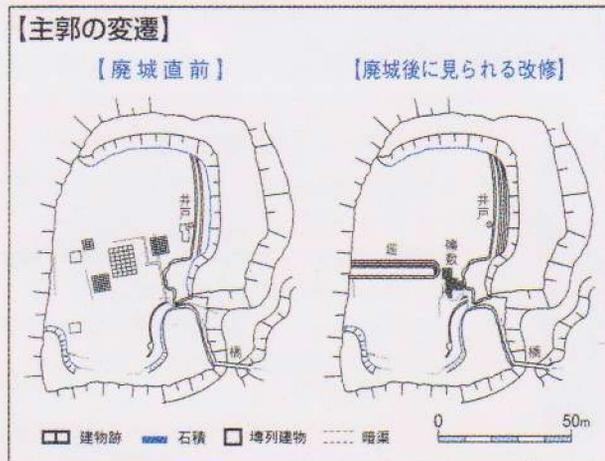


伊丹の位置と各部将の配置を見ると、安土の織田信長を牽制し、当時、海上ルートで信長と敵対していた毛利氏とつながりを持つことができます。これらのことから、これは後に村重が信長を裏切るため結果論にはなりますが、村重は「摂津守」に任じられ、厚い信任を受けていたものの、信長を油断ならない存在として見ていたのではないかと、言い換えると、信長を念頭に置いて摂津の防御を固めるためだったと想像されます。

村重が伊丹へ移った理由ははっきりしませんが、こうした想像はいかがでしょうか。

### 再び池田城が登場

天正6年（1578）、村重は信長と敵対していた本願寺と手を結びます。怒った信長は村重を討伐するため、有岡城に包圍網を敷き、自ら「古池田」に陣を敷いたと『信長公記』にあります。発掘調査によれば、主郭の最後は建物がなくなり、中央を東西に堀を掘って、主郭を南北二つの曲輪に分けていたようです。これは、主郭の防御をさらに高めるとともに、少ない人員でも防御が可能となる構造で、既に廃城になっていた池田城、すなわち「古池田」に手を加えて陣を敷いた時の姿を示しているものと考えられます。





池田城主郭想像復元図

## 池田城と町屋

### 池田にも総構えがあったか

前にも述べたように、伊丹では村重により総構えが行われました。また久宝寺（八尾市）や富田林など、寺を中心に発達した畿内の寺内町は、古くから町の周りを堀や土塁で囲んでいました。では、池田にも総構えがあったのでしょうか。

『信長公記』によれば、永禄11年（1568）、信長が池田城を攻撃する時、町に火をつけたことが落城の契機になっています。町を突破することが落城につながっているのなら、池田にも総構えがあった可能性もあるのですが、今のところ、これを証明する資料はありません。今後の調査研究にゆだねられるべき課題といえます。

### 城にはだれが籠るのか

城には池田氏とその家来が籠るのは当然と考えら

れるのですが、果たしてそれだけだったのでしょうか。

城主のいた主郭に城主とその一族、有力家臣たちがたて籠るのは予想がつくのですが、城域の東と南にあるスペース（今の建石町域）が主郭以上に広がっているのは、何のためなのでしょう。

このことを考えるのに、参考になる事例があります。関東の例ですが、豊臣秀吉が城を攻撃した時の様子を記した文書に「（敵の）城の中には

町人、百姓、女しかいない」とあります。また、当時日本に来ていた宣教師は「日本では、戦があったとき、町人や百姓らは城へ逃げるしか助かる方法はなかった」と報告しています（藤木久志『戦国史をみる目』校倉書房）。これらの事例から、もしかしたら、池田城にある広いスペースは、戦の時、池田の町の住民たちが籠る場所として機能していたのではないかと推定されます。

前に、領主は市の立つ町屋に支配が及んでいなかったと述べましたが、あるいは、そこには支配・非支配という強い上下関係ではなく、町屋の住民からすれば、税または城普請を負担するが、領主はその見返りとして住民を守る義務を負う、という対等な関係があったのではないかと、思われます。

池田城跡については、まだまだ分からないことが多くあり、今後の調査などで徐々にではありますが、明らかになっていくことと思います。

## 公園 施設案内

- ★管理棟……武家屋敷風の造りです。
- ★櫓風展望休憩舎……眼下に広がるパノラマの景色を楽しめます。  
足の不自由な方にもご利用いただけるよう、電動昇降いすを備えています。
- ★日本庭園……自然の姿を水の流れて表現する「池泉回遊式庭園」で、「深山の景」「野の景」「海の景」の三つからなっています。

園内に「遺構復元ゾーン」を設け、井戸、枯山水、礎石をレプリカとして復元しています。

園路は段差を少なくし、歩きやすくしています。

★茶室……使用は団体利用のみ。事前にお申込み下さい。受け付け、問い合わせは、池田城跡公園管理事務所 072・753・2767へ。



池田城跡公園周辺は、市内でも特に歴史的、文化的な施設や緑の多い地域。  
のんびりとミニハイキングを楽しみながら、池田の街をウォッチング。

池田駅東口交差点から、石の彫刻や季節の花が飾られた「さくら通り」を北に向かう。職安「ハローワーク」の角を右折、「池田文庫」を左に折れて坂を登る。つづいて「逸翁美術館」を左手に見ながら坂をのぼると、左手に「池田城跡公園」の入り口がある。城跡公園で池田の歴史に思いをめぐらせた後は、「ふれあい橋」を渡って、緑豊かな五月山に。「緑のセンター」は、花や緑を愛する人たちが集う場所。ゆっくり温室や花壇の花を楽しんで欲しい。緑のセンターから「五月山児童文化センター」を経て「五月山動物園」へ。「世界一ハートのある動物園」がキャッチフレーズのこの動物園では、オース

トラリアからきた愛嬌たっぷりのウォンバットやワラビー、バルーからきたアルパカが迎えてくれる。

帰りは公園広場横の坂を下りて、商店街を抜けていこう。途中、池田の有名な酒「呉春」の蔵元などの古い建物が、昔の街道をしのばせてくれる。商店街のお店を冷やかしながら歩くとすぐ終点の池田駅に着く

☑時間と体力のある人は、「緑のセンター」から「五月山動物園」まで、五月山をハイキングしよう。大阪平野の見晴らしが良く、気分そう快な1時間ほどのコース。緑のセンターで「五月山自然観察マップ」をもらっていきといい。



## 池田城跡公園

広さ15,600㎡

**入園無料**

### 開園時間

[4~10月]  
午前9時~午後7時  
[11~3月]  
午前9時~午後5時

### 休園日

火曜日、年末年始

住所 池田市城山町3-46

TEL 072-753-2767

